

3 蝦夷地のころ

えぞち 蝦夷地の産物コレクション

大きなトドやクマの皮。毛並みが美しいラッコの皮。ワシの羽やツル。干したサケ、ナマコやアワビ。木の皮でつくった縄。アイヌ民族は、このように、狩猟や漁労、採集によって手に入れた物を加工し、和人への交易品としました。そして和人から、米、酒、たばこ、鉄製品、漆器、木綿などを手に入れました。13～19世紀前半の「蝦夷地のころ」は、和人による支配の強まりとともに、アイヌ民族の交易活動の自由がしだいに奪われていく時期でした。

さつもん 擦文文化の終わりごろ、北海道に住んでいた人たちは、本州の人びと(和人)からえぞ よばれていました。これは現在のアイヌ民族につながる人びとです。

13世紀以降になると、北海道に住む人びとの生活スタイルが大きく変化します。例えば、竪穴住居から平地住居への変化、チャシの築造、鉄製品の大量使用、クマを送る儀礼などがあげられます。こうした変化に注目し、それまでの擦文文化とは異なる文化に変わったという意味で、学問上「アイヌ文化」とよんでいます。いま、わたしたちが考える「アイヌ文化」とは、13～19世紀前半に、アイヌ民族が和人やサハリン(樺太)の人びとと交易を行うなかで少しずつ変化し、形成されたものです。

14～15世紀になると、多くの船が日本海を行き交い、中国の陶磁器や銅銭が北海道へ持ちこまれます。また、和人もさかんに北海道南部へ渡り、館がつくられます。やがてアイヌ民族の生活がおびやかされることも増え、15世紀中ごろから16世紀中ごろまで、両者の争いが続きました。こうしたなか、和人勢力は蠣崎氏によってまとめられました。

1599(慶長4)年、蠣崎氏は姓を松前と改め、1604(慶長9)年には、江戸幕府からアイヌ民族と交易する権利を与えられます。やがて1630年代ごろに商場知行制が成立し、アイヌ民族にとって不利な交易が行われるようになると、そのやり方に不満をもった人びとが立ち上がり、1669(寛文9)年にシャクシャインの戦いが起こりました。

アイヌ民族はこの戦いに負け、以後松前藩の支配を強く受けるようになります。18世紀になり、場所請負制が蝦夷地に広がると、アイヌ民族は、和人の商人が経営する漁場などで働くようになります。また、18世紀後半に外国船が蝦夷地周辺に現われると、松前藩や幕府はアイヌ民族への支配をいっそう強め、アイヌ民族の生活が急速に変わっていきました。



アイヌ民族と松前藩

1604(慶長9)年、松前藩に黒印状が与えられると、アイヌ民族の和人との交易は大きく変わっていきます。それまでは、アイヌ民族が本州にも出かけ、自由に交易を行っていましたが、しだいに交易をするために松前へ行くようになりました。1630年ごろからは、松前藩の家来がアイヌ民族の村へやってくるようになり、アイヌ民族にとって不利な交易が行われるようになりました。さらに砂金めあての和人がたくさん入りこんできて、アイヌ民族の生活の場が荒らされるようになりました。



ロシアの進出とアイヌ民族

1789(寛政元)年、クナシリ・メナシのアイヌ民族が、松前藩や和人の商人のずるいやり方に我慢できなくなり、和人71人を殺害する事件が起こりました。アイヌ首長たちの説得により、事件を起こした人たちが捕えられ、そのうち37人が処刑されました。一方、このころ千島列島にロシアが進出し、1792(寛政4)年にはロシア船が蝦夷地へやってきました。蝦夷地の動きに危機感をもった江戸幕府は蝦夷地を直接に治めることとし、アイヌ民族への支配はいっそう強まりました。